

# PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

## LETTER

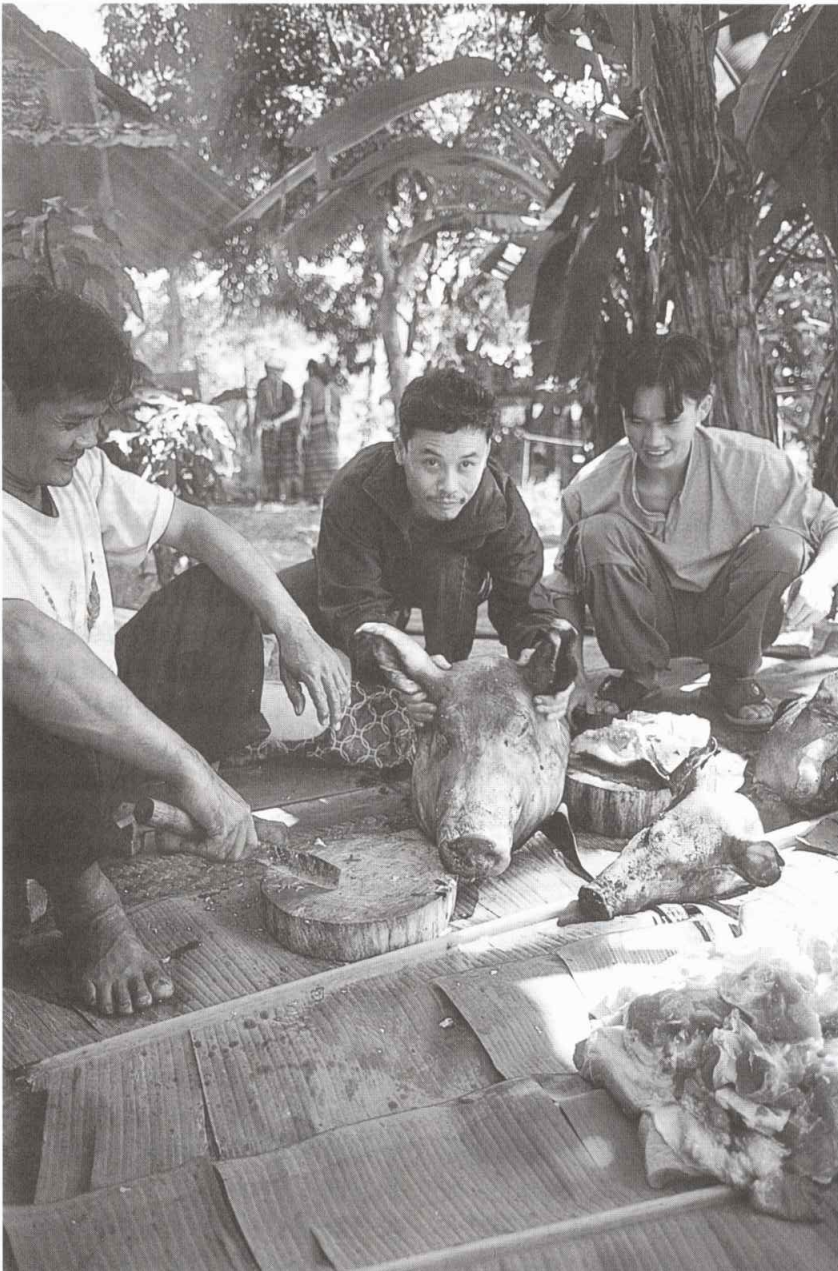
# 86

### 2003.3

- フォローアップレポート . . . P. 3
- 研修生レポート . . . P. 4-5
- 私たちが変わるための試み . . . P. 7

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867  
E mail：phd@mb1.kisweb.ne.jp  
U R L：http://www.kisweb.ne.jp/phd  
定 価：100円



年の瀬に訪ねたカレンの村で結婚の披露宴に招かれた。日頃、質素な村の食事もここぞとばかりの大ごちそう。豚を5頭、牛を1頭つぶして裏方さんは大忙し。

タイ、メーホンソン県 撮影 FUJINO T.



## 東西南北 問題解決 取組日記

### 気持ちでつながる

12月〇日

恒例の年末スタディツアーで北タイへ。この時期は乾季で、雨が降ることはめったにないはずが、今回は雷と雨に見舞われた。村の人も「どうしたんだろうね」と。移動中も雲が多くトラックの荷台で揺られて行くのに日射しがなくて寒い。自然を相手にしての農業には、このような不順な気候は不安要素だ。

毎年このツアーに参加され、回数は軽く10回を越えていた兵庫県波賀町の田中五郎さんが、今回はおられない。前号のニュースでお伝えしたのが8月に78才でお亡くなりになった。

85年から研修生を引き受け、農業や組合活動等の指導をしていただいていた。代わりに奥様、娘さんご夫婦そしてお孫さんが旅の前半参加された。毎年五郎さんが訪ねた村がどのようなところかに触れ、集まってきた村の人たちに挨拶をされた。ご家族がお帰りになった旅の後半に訪問した別の村でも五郎さんを偲ぶひとときが持たれた。機能的な交わりではなく、PHDならでの人の気持ちがたくさん入った交流を実感した。消えてしまいうすいモノやおカネに頼る関係ではなく、後々まで心に残る人と人との出会いと交わりはこれからも大切にしていきたい。



田中さんご家族と研修生ワラヤさん（左から2）  
コマさん（左から3）

### ほほどでそこそこ

2月×日

3回目のお招きとなる自動車メーカー労働組合の研修会でお話をした。

大学の先生の講義の後に出番。その日の3コマ目で、受講者にはつらいところ、「NGOから見た日本」というお題で話す。

確かに少し前に比べたら日本経済は低調だ。しかし、世界レベルで見たらそれでも大量生産・大量消費国。失業率が上がり、企業の中でリストラが行われている事情もわかるが、一番良い時と比べると、悪く見えるわけで、ほどほどの経済状態の中で皆がそこそこ食べていけることを考えることが必要に思える。その時に必要な仕事は何で、どれくらい働くことが良いのか、会社に勤めることを前提とした働き方だけで測ることに無理がある。人が生きていくために何が必要なのかを考えた時、いわゆる経済活動に励んで、たくさん稼いでたくさん使う生活だけが目指すものだろうか。経済活動が全く必要無いとは言わないし、言えないが、今の日本のような無制限なあり方には異議がある。パプア・ニューギニアの村の生活はそのモノサシで測れば何とかしなくてはということになってしまうが、十分ではないにしても、彼らの今の状態が悲惨とはとても思えない。誰が作ったモノサシで、誰にとって都合のいいモノサシなのかを良く考えてみる必要がある。

講義の後の食事の席で「会社としては他のメーカーとの競争に負けたら会社がやっていけない、そうすると給料がもらえなくなるから、必死で働いて、本当に必要かどうかを二の次にしたモノを売っている」と本音を伺った。「労働組合はこれまで賃上げと労働時間短縮に取組んできたけれど、この時期そんなことを言うてはいられない。仕事を確保すること、首を切られないことが大事」と言う。そこで私は考えた。きつい競争をして、本当に消費者が必要としていないレベルまで差別化、新しさ、高級さ等を盛り込み、たくさんの宣伝で買わせるように持っていく。そして前のモノをゴミ化させる。そのようなやり方はそろそろやめて、本当に必要なものを同時代のまわりの人たち（世界を含む）と後の世代の人たちに迷惑をかけないように作り、使う。それで

まわるような体質の会社に変えていくことが必要ではないか。そんなことを会社と相談していく組合であるべきなのではないかと生意気に申し上げた。次から呼ばれなくなるかもしれない。少なくとも謝金が減るか。それも困るが。

### 人をつくるコスト

2月〇日

新年度の計画と予算を決める理事会に向けて、02年度のまとめを行う。事業は20周年の際にあがった点を押さえながら、ほぼ予定通り実施できたが、収入が思うようにならない。アジア・南太平洋の村の人々とのお付き合い、そして日本の社会の問題を見ていく中で、世の中、お金お金と考えることに問題があることに気づきながらも、自分たちの活動にお金がある。バラまくわけではないから、いくらでも欲しいというわけではないが、会の趣旨をご理解いただき、そこから生まれる会費、ご寄附でできるだけやっていきたい。設立当初からのその方針に変更はないが、ただ皆さんにお願いを繰り返すだけでは、限界がある。他の国際協力団体との共同事業やスタディツアーの共催等から得ることも検討している。

困った状況にすぐ必要な食糧、薬品、衣料等の提供、医療等の緊急救援活動や目に見える建物や機材による協力は他にお任せし、ウチはすぐの効果にはなり難いが、様々な地域の課題、問題に取組む人を草の根レベルに増やしていきたい。そのための研修生を支える経費とそれを軸とした日本とアジア・南太平洋の交わりをつなぐ役目の仕事に関わる人材を支える費用、ふたつの意味での人づくりのコストへの理解が今以上に広がる努力をしなければならない。人にかかるコストの必要と大切さがご理解いただけるよう新年度は心していきたいと思う。

社会を少しでも良い形にしたいと思って活動する組織で仕事をしたい人が増えている。しかし、その手の職場は限られ、そんな仕事で食べていくことは難しい。例えばPHD協会のような存在が必要だと思っていただけの仕事をしなれば。

総主事代行 藤野達也

## フォローアップ レポート

タイ・北部

2002.12.23～2003.1.2

年末年始のタイスタディツアーには3人の指導者の方が同行。指導者の目から見たタイを報告していただきました。

### 白浜 松喜さん

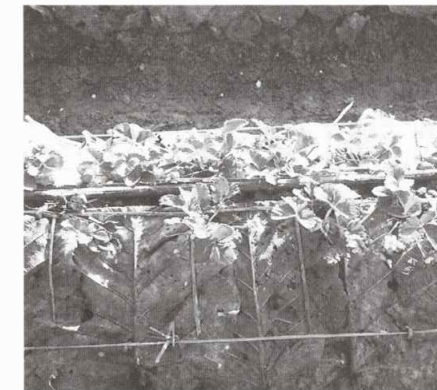
（兵庫県弥栄村）

看護師から百姓に。自然農法を実践。

### 密植

米、大豆、ピーナッツ、葉もの、全てが密植。例えば、稲の間隔は、タイでは手植えで15cm×10～15cm、日本では機械植で30cm×10～15cm、私の所では手植えで60cm×15cm。これ程の違いがある。稲株の間隔が広くても狭くても面積当たりの穫れる量は同じだと言われている。疎植にすれば、日当たり、風通しも良く、虫もつかなく、株も根も良く張る。その代わり草も生える。密植にすると、1株が小さくなり、日当たり、風通しも悪く、虫がついたり、病気になる易くなる。タイはどうなのか？

露地で作られていたイチゴはすばらしい。畝は高く、畝幅も50cm位あった。これなら水はけが少々悪くても大丈夫だと思った。日本ではビニールマルチの所が多いが、チークの葉が敷き詰められていた。日本で露地栽培をすると、上からはカラスなどの鳥に、下からはナメクジやダンゴムシに喰われてしまう。タイにはカラスがあまりいないようだ。



チークの葉でマルチ（ポッケオ）

### お互いの生きる道

同じ野菜を作ってもこんなに差があるんだと勉強になった。気候風土

に合った野菜を見つけ、その土地に合った作り方も必要。日本に来て勉強になる事もあれば、役に立たない事もあるかもしれない。国際交流をしながらお互いの生きる道を探ることができたら素晴らしいと思う。

### 私たちの生活

何不自由なく暮らしている日本の子供達に我が家の子供も含めてタイに行きたくて欲しいと思う。蛇口から溢れる湯水。明るくもつけてある電気。私たちが反省しなければならないことに気づくことの多い旅でもあった。

### 曾我 一作さん

（兵庫県日高町）

農業高校で畜産を教えている。

### なぜ覆土をしないのだろう

畑でちょうど大豆の播種をしていた。米の収穫後起耕をせず、棒で深さ5cm程の穴をあけ大豆を2、3粒落とす。日本でもこのような栽培を行っている所もあるので、特殊な方法ではない。しかし、覆土はしていなかった。

野菜の種まきも見たが、これも同じ方法だった。面積が広く灌水されていない畑では、種を播いた後わらや糞を播くと、土壌の固結と乾燥防止、止、鳥害防止に役立つに違いない。



大豆の種まき（メーサリアン）

### 悠々と放し飼いをされている牛

牛の飼育は山での放牧。出荷や農作業として必要な時に塩で牛を寄せ、自分の牛を捕まえる。「自分の枝や口を持っているのに、なぜ日本では人間が餌を持って行くのか」と聞かれた。「乳や肉をもっと取ろうとすれば、金のかかる飼料を与えなければならなくなるよ」と笑って答えた。サワンさん（98年）は友人と共に、

10数頭の牛を飼育しているが、柵の全くない水田で、収穫後の刈り株や畦草を自由に食べまわり、夕方1カ所に牛を集め、短い杭を打ち込みロープで繋留していた。毎日繋ぐ圃場を替えて牛糞が田に均等に残るように工夫したり、虫を防ぐためとのことだが、牛群の中心でたき火をしていた。日本でも昼夜放牧をしている所はあるが、このような飼育は聞いたことがない。ポッケオでも野外繋留している所があったが、多くは簡単な小屋掛けをして、そこに追い込んで繋いでいた。たき火でどれくらい虫が防げるのか疑問もあるが、火をつけたまま管理人もいなくなる大胆さには驚いた。

### 寒者 恵さん

（兵庫県三木市）

保健福祉センターで保健指導をしている。

### 実践と成果

1年間日本で研修した研修生が、自分の国に帰って研修の成果を見せることは、村の人々の期待も多くあるほど、プレッシャーも強いのではないと思う。日本とは明らかに違った環境の中で、それぞれの課題を実行すること自体が困難。特に保健衛生は、例え研修生たちが実行できても、その成果は早くも10年くらい先に現れることを覚悟していなければならないが、村の人たちにその論理は通用しないだろう。

そのため、研修生のフォローアップが必要になる。例えば保健衛生ならば、診療所のスタッフなどにアドバイザーになってもらうことも必要であるし、彼らの存在を知ってもらう必要もある。

また、現在PHDが実際にやっているように、同じ村から何人かの研修生を招き、研修生同士が力をあわせることも大切。

今回のツアーでは、彼らが自分の国に帰ってから実践することを、日本の研修中からの絞っておくこと、帰国してから実践しやすい方法などその国の実状に合わせて研修してみることなど、指導者にもその国の勉強会が必要ということ学んだ。



# 20期生 10月中旬～2月中旬

## スラチ・パティスティクンさん

(タイ、男性、30才)

- 農業研修-
- 10. かごしま有機生産組合 (鹿児島県鹿児島市)
- 11. 市川克久 (同県霧島町)
- 12. 西川則孝 (愛媛県丹原町)
- 13. ふえろう村塾 (兵庫県小野市)
- 14. 西日本三菱農機販売株式会社但馬支店 (同県出石町)
- 寺田まさふみ (アレンジ・同上)
- 15. 株式会社南兵庫クボタ (同県明石市)
- 兵庫県社農林振興事務所 (同県社町)

## スウェウインさん (ビルマ、男性、24才)

- 農業研修-
- 8. 田中利男 (島根県木次町)
- 9. 白濱松喜 (同県弥栄村)
- 10. 泉精一 (愛媛県中島町)
- 11. ふえろう村塾 (兵庫県小野市)
- 12. 西日本三菱農機販売株式会社但馬支店 (同県出石町)
- 寺田まさふみ (アレンジ・同上)
- 13. 株式会社南兵庫クボタ (同県明石市)
- 兵庫県社農林振興事務所 (同県社町)

## ダルミアティス (通称ミミ)さん

(インドネシア、女性、31才)

- 洋裁・保健衛生研修-
- 13. くらふと・ぎやらりー多田 (兵庫県芦屋市)
- 14. 宍道町健康センター (島根県宍道町)
- 浜村愛子 (滞在・同県加茂町)
- 15. 保健相談センター (同県東出雲町)
- 米田祝子 (滞在・同県八雲村)
- 16. くらふと・ぎやらりー多田 (兵庫県芦屋市)
- 17. 三木市健康福祉部健康課 (同県三木市)
- 18. 兵庫県三木健康福祉事務所 (同上)
- 光田弘・和子 (滞在・同県神戸市)
- 19. くらふと・ぎやらりー多田 (同県芦屋市)
- 20. 高橋武子 (同県三木市)
- 光田弘・和子 (滞在・同県神戸市)
- 21. 小規模作業所ステップハウス (同県高砂市)
- 樋野泰弘・素子 (滞在・同上)

### 東日本研修旅行

<福井県>美浜北小学校、美浜東小学校、敦賀南小学校、美浜南発<岐阜県>中濃教会、多治見市民プラザまつり<愛知県>アークス東海<岐阜県>国際ソロプチミストかかみ野<神奈川県>PHD鎌倉交流会、湘南白百合学園小学校、清泉女学院中学校・高校、もみの木クラブ交流会、山崎小学校、谷戸<東京都>ロータリー米山記念奨学会、全日本自動車産業労働組合総連合会、アークス仏教国際協力ネットワーク、恵泉女学園大学<山梨県>山梨県国際交流協会・山梨YMCA、山梨英和中学校・高校、山梨英和大学<長野県>松本教会<岐阜県>国際ソロプチミスト高山、PHDひだりの会<愛知県>トヨタ自動車労働組合、人間環境大学、小牧幼稚園

### 西日本研修旅行

<宮崎県>都城中央ロータリークラブ<鹿児島県>かごしま有機生産組合、西田小学校、だるま保育園<熊本県>水俣病センター相親社、We love children、熊本市国際交流振興事業団、地球緑化の会<大分県>下郷農業協同組合<福岡県>庄内町生活体験学校、福吉伝道所、祝町小学校<山口県>梅光学院大学女子短期大学部、梅光女学院高等学校<福岡県>高槻小学校、アジアを考える会・北九州、西南女学

院中学校・高校<広島県>ハイヅカ湖畔の森、三良坂小学校、日影館高校、共生庵、平和学習、H O P E、広島東南ロータリークラブ<愛媛県>松山古町教会、松山東雲女子大学、ホワイトハウス、田滝小学校<香川県>上高野文化センター<岡山県>豊田小学校、学芸館高校インターアクトクラブ、岡山YMCA、産業廃棄物処理場見学、岡山西南ロータリークラブ

### 共通研修

旅路の里 (大阪市/釜ヶ崎の歴史と現状)、淡路島モンキーセンター (洲本市/農業の弊害等)、明石協同歯科 (明石市/口腔衛生)、JA神戸西宮農センター (神戸市/協同組合)

### 兵庫県内研修旅行

八鹿町-山崎町-篠山市-春日町-社町-三木市-高砂市

<敬称略>



東日本研修旅行での交流会 (アークス東海、愛知県)

### 日本は反面教師…

去年の12月8日～9日には兵庫県内の農業指導者の方々に社町にお集まりいただき、日本の有機農業の現状やPHDの研修事業について意見交換を行う会を持ちました。8日は夕食時から深夜まで、9日は午前中にかけてリラックスした雰囲気の中、率直な意見や提案が数多く出され時間が足りない程でした。

参加していたスウェウインさんとスラチさんにとっても良い刺激になったようです。「日本の農家の人たちはたくさん勉強しているし、色々なことを考えながら有機農業をしているのがすごいと思う」と話していました。

話題が多岐に渡ったため会の内容を一言でまとめるのは難しいのですが、参加者の方から共通して出されたご意見は、「研修生たちの村も大変だが、日本だって今や慣行、有機を問わず農業そのものが厳しい状況になっている。研修生たちはとにかくありのままの日本を見て、あとは自分たちで取捨選択し、それぞれの出身地域で努力を重ねていくしかない。おそらく今の日本では反面教師的に学んでもらうことの方が多いいのではないか。技術的なことも大事だが、最

# 研修生レポート

後はやる気や向上心といった“気持ち”の部分が一番大切」というものでした。

### 筑豊を訪れて

西日本研修旅行では毎年、現在の日本が抱えている社会問題や近代化の過程における負の遺産等について学びます。それは、上記の農業指導者の方々もおっしゃっているように、研修生たちが自分たちの出身地域の将来像を考える上で日本を反面教師的な視点で捉えることがとても重要だろうと思われるからです。



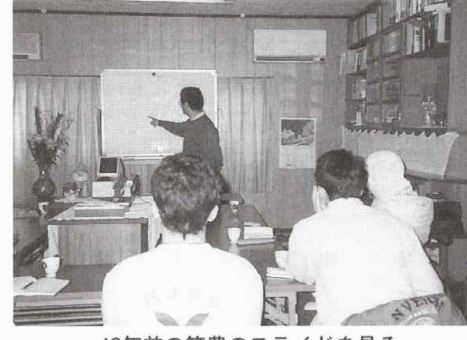
水俣で語り部の上野さんから話を伺う

水俣や広島と並んで、毎年訪れる社会学習の地が福岡県田川郡にある福吉伝道所。この地域はかつて筑豊炭田を中心に炭坑の町として栄えたところです。しかし、1960年に日本の主要エネルギーが石炭から石油に代わり、アメリカやヨーロッパでは失業対策をしながら徐々に切り替えていったのを、日本では短期間でやったため筑豊だけで15万人の失業者が出ることになりました。

学生ボランティアとして1961年に筑豊を訪れ、その後38年間牧師をされている犬養さんから約40年前の筑豊の様子や現在の町の問題を伺いました。

粗末な家で暮らす家族、5～6才の子供が弟や妹を背負いながら遊ぶ姿、水汲みをする女の子、学校でもらったパンをその場で食べず家で家族と分けるために持って帰る子供たち、犬養さんたちの紙芝居を食い入るように見つめる好奇心一杯の澄んだ眼…。当時撮られたスライドを見ながら、研修生たちが時折少し嬉しそうに言います。「私の村と同じですね。」

犬養さんから、「確かに当時は衣食住に事欠き、いわゆる“貧しい”生活を強いられている人がたくさんいて、それは大きな問題だった。しかし、例えば今の日本の子供たちと40年前の筑豊の子供たちを比べると、昔の子供たちの方が遅く、心が“豊か”だったと思う。日本はこの40年で経済的な豊かさや心の豊かさが反比例してしまったのではないだろうか」と説明を受けた研修生たち。本当の“豊かさ”とは何なのかについて深く考える機会になりました。



40年前の筑豊のスライドを見る

また、失業対策として今なお続く生活保護についてもお話を伺いました。学費や医療費が免除された上に、仕事をしてもらっても支給額よりも低い収入だとその支給額が減るだけで手取りは変わらない、といった制度的な問題点のため結局労働意欲がなくなってしまうという話を聞き、「人を助けるときはお金だけをあげるのではなくて、新しい仕事を作って自分がんばっていけるようにすることが大切だと思いました」と研修生たちは感想を述べていました。

### 釜ヶ崎から日本が見える

長引く不況で失業率は過去最高を更新するばかり。神戸にもホームレスの方たちの姿が目立つようになってきました。そんな中、今年度も2月8日～9日にかけて釜ヶ崎を訪れ、歴史や現状を学んだり、炊き出しや夜回りのボランティアに参加させていただきました。

60年代、炭坑の相次ぐ閉鎖等により失業者が増加したことが釜ヶ崎をはじめとする寄せ場(日雇い労働者のまち)の人口を膨れ上がらせた

聞いた研修生たちは、遠い筑豊の話がこの地につながっているという歴史の流れを知りました。

釜ヶ崎を訪れると毎年研修生から同じ事を聞かれます。「この人たちの家族はどこで何をしていますか。どうして家族と一緒に暮らすことができませんか」「貧しい」といわれている研修生たちの村にホームレスの人はいません。家族や周りの人たちが必ず面倒を見るからです。

いつも我々を受け入れて下さっている「旅路の里」の英(はなふさ)さんは、「釜ヶ崎のホームレスの人たちの問題はもちろん仕事がないことだけでも、それと同じくらい大きな問題は今の日本で“家族”というものが機能しなくなっているということだと思います」と話されました。その他にも、とにかく自分たちの目の前からいなくなればいいという考えに基づいた世論や大阪市の対応。3日に1件もの頻度で起きている若者たちによる暴行事件。高度経済成長を支え、原子力発電所の清掃のような誰もやりたがらない、しかし日常生活に欠くことのできない仕事に就いている労働者に対する世の中の冷たい対応は、現代日本の様々な問題を浮き彫りにしています。

深夜2時過ぎに夜回りが終わり、報告や振り返りの会をしている時、ミミさんがきっぱりと言いました。「日本人はお金持ちになったけれど、心は貧しくなりましたね。」



旅路の里にて

この号が皆さんのお手元に届く頃には、研修生たちはそれぞれの出身地域に帰っていることでしょう。研修生と一緒にあって、日本に住む私たちも自分たちの地域を少しでも良くしていけるようにがんばっていきましょう。納堂邦弘

## 第11回 日韓農民交流

チュ チョンベ  
◆朱 挺培さん (男性、54才、ブルーム信用協同組合理事長、通訳)

ジョン ヘイル  
◆丁 海日さん (男性、43才、稲作など)

ファン キュサン  
◆黄 圭相さん (男性、41才、畜産、野菜)

チョ ヘチン  
◆曹 惠真さん (女性、19才、ブルーム専攻部[農学部]2年生)

### <スケジュール>

淡路島モンキーセンター(洲本市)、山口農園(南淡町)、能勢農場(大阪府能勢町)、橋本農園(市島町)、中野農園(春日町)、春日町国際交流協会、春日町工コ会の会、一色農園(市島町)、市島町有機センター、「食と農を考える交流会」(神戸学生青年センター、神戸市)、食品公害を追放し安全な食べ物を求める会、信長たか子(神戸市)

昨年10月28日～11月2日にかけて、2年ぶりに韓国から4名の有機農業関係者を招き、県内を中心に視察や交流プログラムを行ないましたので、参加者のレポートの一部を紹介します。

丁さん —— 幸いに韓国では、特に有機農業の分野は多くの若者たちが関心を持って取り組んでおり、日本で心配されている高齢化問題、後継者問題等はそれほど深刻には感じられません。しかし、韓国も時が過ぎればこのような問題を真剣に考慮しなければならなくなるだろうと思います。人々の多くが大変な仕事には顔をそむけ、簡単に裕福になるほうを選択する流れを見るかぎり、韓国の農村も日本と似てきていると気づくことができました。

黄さん —— 両国の有機農業が、経済的なことよりも環境に配慮しつつ安全な食料を供給し、しかも農村を活性化できるようになればと思います。

これからも、日本と韓国がお互いに切磋琢磨しながら有機農業を上げていけるよう、PHDもその橋渡し役を続けていければと思います。



残留農薬の弊害について学ぶ (淡路島モンキーセンター)



# 原点 → 現時点 → これから

国内研修生 鴨川佳枝

PHD協会で研修をする毎日は、頭で考えるのではなく行動して感じる、発見の連続です。そんな中で一番強く感じていることは、人の優しさと繋がり大切さです。

職員の方々にもう優しさ、研修生からもう優しさ、研修旅行先で貰った沢山の優しさに触れることによって、一人で生きていくのではなく、助けられながら生きていくのだということを感じています。日本も世界も未来に希望を持たなくなるようなニュースばかりですが、ここには研修生達のことを真剣に考える職員の方々がいる、その活動を支えるボランティアさん、会員・協力者の皆さんがいます。本当に沢山の人の優しさを感じます。そして私も、一人ではなく、みんなと一緒に何かをしたいと思うようになりました。

研修生と、同じ研修生という立場で一緒に勉強できたことはとても楽しく、そして彼らと居ることによって、まだ見たことのない世界のこと、そこに繋がっている私達の生活のことに少しずつ気づくことができました。

釜ヶ崎に行き、なぜホームレスと呼ばれる人達が存在するのか、というお話を聞いた後に「日本はおかしいよ、自分の国に困っている人がいっぱいいるのにどうして助けられないの?!」と言った研修生の言葉がとても胸に残っています。もちろん、飽食・大量消費社会の日本が貧困・飢餓に苦しんでいる国に対して、できるかぎりの協力をしていくことは当然の義務だと思います。しかし一方で、日本における年間自殺者3万人という数が日本社会の生きにくさをはっきりと示していると思います。

昨年10月から国内研修生としてお迎えした鴨川さん。20期研修生と共に西日本研修旅行、県内研修旅行などにも出かけ、これからフィリピンの比較研修旅行にも出かけます。研修期間も残りわずかとなりました。

自分の無知を恥ずかしく感じると共に、色々なことを吸収し、自分の村のために頑張っていこうとしている研修生をみてみると、私が今後どのように生きていくのかを真剣に考えさせられます。

ここ数十年における世界の技術的な進歩には目を見張るものがあり、そこには人々の多大な努力があったと思います。しかしその努力を、お金を得るためだけに使ってきた社会だから、今日至る所で問題が生じているのではないかと思います。

未来のために私達ができること、沢山あると思います。まだ始まったばかりです。この研修を通じて出会った人たちと共にこれからも考え、行動していきたいと思っています。

\* \* \* \* \*

## 東北部

ワラヤさん (88年度)

村を朝6時に出発し、夜11時にチェンマイで合流してくれました。大変なバスの旅。現在2人の子供と暮らしています。農業を中心に化粧品販売や英語の翻訳もしています。

## 北部

プリチャーさん (85年度)

去年メラノイにある店の裏に巨大な倉庫を建てました。こちらは卸し専門。従業員を7人雇い、忙しくしています。お客さんは山の人が多く、また、村人が作るお菓子やバナナなどを買い取り町の人に販売しています。

サワンさん (98年度)

象を使っの事は少なく、村で農業に専念しています。畑では12種類以上の野菜を栽培しています。20頭牛を飼っています。村人4人に堆肥の作り方を教えたが、虫が大量発生し農業を使わざるを得ませんでした。子供は14才と10才の2人。お金がかかるのは日本と同じ。

## 帰国研修生短信

—タイ—

ベリポーさん (99年度)

おめでたです！昨年12月28日に第2子(女)が誕生しました。名前はムスイポー(意味:ムシキーの花)です。NGO職員の夫の実家に行くこともあります。ムシキー村にも帰ります。布グループとのつなぎ役です。



ベリポーさんとムスイポーちゃん

ブラチャックさん (98年度)

ものもらいが出てツアーには同行できませんでした。夏頃2人目のお子さんが生まれる予定。今住んでいる家の近くに新居を構える予定も。

ブンシーさん (00年度)

ライ村で家族5人と兄夫婦と一緒に住んでいます。高校卒の資格を取るために週1回学校に通っています。病気の祖母のお世話はブンシーさんが。布グループのメンバーがいくつかの村に分散しているのでグループ運営が難しいようです。

ナロンデッさん (01年度)

昨年は雨が少なく、米の収穫が少なくなりました。訪問時にはピーナツ栽培をしていました。今年2月に近所に住むヌワさん(24才)と結婚の予定。カレンの人は婿入りですが、彼の場合はヌワさんが彼の家に入るそうです。

## 私たちが変わるための試み —何から始める?—

### メンバー紹介

**Aさん:** PHDのワークショップに参加したことがきっかけで、主にワークショップの企画・運営に数年前から関わる。高校教員。

**Bさん:** 小学校教員。PHDの元職員の紹介がきっかけ。以降ワークショップに関わる。

**Cさん:** 大学生。友達の先輩の紹介で当会の20周年の時にボランティアを始める。去年インドネシアスタディツアーに参加。

\*他にも中学校教員で以前PHD協会で2ヵ月間研修を受けた方、ワークショップに参加した事をきっかけにプログラム作りに関わっている方もこの企画に参加して下さっています。

— 今日集まってもらった理由ですが、今までプログラムを通して、自分たちの生活を見直し、共に生きる社会を作るために何ができるのかを提案してきました。でも、私たち自身が日々の取り組みとして実際にできていない。そこがPHDのまだ十分ではないところ。例えばPHDではこんなことをしているという具体的な動きを作っていくために皆さんと一緒に考えていきたいと思いました。

A: 何ができるかは、実際に動き出している人から具体的な行動やその過程などの話を聞いてみたらそこからヒントが得られると思う。

— 例えば、1年通してのテーマを決めて、

国際協力というと海外に出かけてプロジェクトやボランティア活動をするというイメージがありますが、それだけではないはず。社会の仕組みや私たちの考え方が変わることによって、結果として他の国の人々の生活が変わり共に生きていく社会になる。これも国際協力では。アジア・南太平洋の村々から来ている研修生たちは、日本での研修の後それぞれの村づくりに励んでいます。共に生きる社会を目指すために、日本にいる私たちは何をすべきなのか。日頃事務所に入りに来てくれている方々と一緒に考えるミーティングを11月から始めました。

講師を呼んで話を聞いたり時には体験学習をするのはどうですか。

A: テーマを決めて勉強会を定期的にする事で、多くを学び深く考える。それが変わるということにつながるんだと思う。考え方や行動が実際にどう変わるかは本人次第です。

— 農家を見学したり、話を聞くというのも良いけど、それだけではどうしても受身になるから、私は体験をしながら勉強していきたいと思っています。食と農というテーマでいえば、実際に野菜を作ってみるとか。

A: 私の関わっている学童保育所の活動を例に挙げると、月2回子供と親が畑に出かけて行き、堆肥づくり、草取り、米や野菜の収穫を一緒にしています。堆肥には、保育所が出た生ゴミも使っています。1回の作業だけだとなかなか見えてこないものも、1年を通して関わりと見えてくる。例えば土作り、作物の成長、自分達で作った食べ物の味など。他に私は個人的に味噌トラストにも参加しています。これは農家の大豆の種まきから収穫、味噌づくりまでに一口4千円で関わるものです。

— 農業の他に森や山のことで言うと、PHDが毎年やっている林業体験合宿のスタッフは、年2回の恒例のプログラムだけではなく、スタッフ側も勉強会や体験学習をして、深めていきたいという話をしています。そことつながっていくということもできますね。

C: 他には研修生が毎年2月にしている釜ヶ崎での炊き出しや夜回りもしてみたいです。国内版スタディツアーもいいですね。

B: 研修生は水俣病や広島原爆についても勉強していて、そこが大切だと思いました。

私たちももっと日本の抱えている問題に対しても考えていく必要があります。研修生は研修生の村で、私たちは私たちの地域で取り組むことも大切。健康な暮らしのために何をどう食べるのか、ファーストフードやインスタント食品についてどう考えるのか、新しいモノを買いまだ使えるモノを捨てるという消費生活、環境問題など、考えればいろいろありますが、まず、私たちが取り組めることから始めていきたいと思っています。今後もこの話し合いを続けていきます。試行錯誤の様子もその都度お伝えしていきたいと思っています。

## 年末募金のお礼とご報告

12月の会報とともに年末募金お願いのチラシをお送りしました。年末募金の期間(11月下旬~1月末)に今年は695件で695万円のご寄附をいただきました。この数字は過去2年間と比較すれば(2000年が684件753万円、2001年が590件611万円)、良い数字と言えらると思います。日本全体の経済状況が悪く、皆様もそれぞれのご事情を抱える中、ご協力をいただいていること感謝しています。

しかし年間を通して寄附収入を見た場合、厳しい状況が見えてきます。年間の寄附収入の目標を全体収入の約6割に当たる3千万円としています。

90年代は何とかこの目標を達成してきましたが、今年は難しい状況になってきました。年間を通して約12%に当たる約350万円の減少が予測されます。件数は昨年並みなのですが、特に3万円以上のご寄附が急激に減少していることが原因となっており、1件当たりの金額が下がっているのです。このことは年末募金にも当てはまり、件数の増加に金額が比例していないことから分かります。実は当会の活動を支えるもうひとつの柱となる会費も減少が予想されており、これが加わればさらに大幅な減少となります。

年明けから今年度の活動評価と来年度の計画の話し合いを続けてきましたが、財政的に言えば苦しい状況ですが、今にも戦争が起こりそうな世界情勢の中で「平和と健康を担う人づくり」というPHDの理念の重要性がより高まっている今こそ、たくさんの方に活動を知っていただき、よりよい活動にしていかなければならないという積極的な意見が出ました。共に生きる世界に向けて、前向きに草の根の人々への協力と交流を続けていきたいと思っています。これからも応援をよろしく願います。



## 第21期生紹介（4月上旬来日予定）



### アンテイさん（30才、男性、フィリピン）

エディさん（99年度）と同じ地域からの農業研修生で、毎年3月の比較研修旅行の時にはここ数年お世話になっていた青年です。日本では、有機農業や協同組合の運営等について学ぶ予定です。



### エルリナさん（30才、女性、インドネシア）

今年度のミミさんに続く、タベ村から5人目、女性としては2人目の研修生。女の子2人（11才と5才）と男の子（7才）のお母さんです。日本での研修テーマは保健衛生と洋裁です。



### ケン・ター・ウェさん（22才、女性、ビルマ）

スウェウィンさん（02年度）と同じ村出身で、2人目の研修生になります。両親と弟（20才と8才）、妹（13才）の6人家族。保健衛生や栄養、保育に関心が高く、有機農業も学びたいとのこと。

## PHDオリジナル写真ハガキ 2000年版

アジアの子供や果物を写真におさめ、ハガキにしたものです。ハガキを通して、皆さんにPHDを、アジアの様子をご紹介します。8枚1組で500円です。お問い合わせ、ご注文は当会事務所までお願いします。



LIVING IS SHARING

## PHD NEWS

### ◇会費・ご寄附寄託状況

|          |        |             |
|----------|--------|-------------|
| 2002年10月 | 81件    | 11,174,288円 |
| 11月      | 263件   | 2,813,262円  |
| 12月      | 579件   | 4,624,206円  |
| 2003年1月  | 171件   | 1,433,336円  |
|          | 1,094件 | 20,045,092円 |

前号にて年末募金のお願い等をさせていただき、以上の通り、皆様より多くの会費とご寄附を頂きました。皆様からのご浄財を厚くお礼申し上げます。依然、厳しい状況が続いております。皆様からの、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

### ◇訃報 渡辺省悟さん

（評議員・たんば農文塾代表）

PHDの設立当初から22年研修生の

受け入れ、指導に留まらず、林業体験「枝打ち」などの地域への拡大を担ってこられた兵庫県篠山市の渡辺省悟さんが昨年11月12日、ご病気でお亡くなりになりました。63才でした。

近年は帰国した1期研修生パラト・ピスタさん（ネパール）の活動を支援する「篠山ナマステ会」を立ち上げ、ネパールの山の子供と地元篠山の子供達の教育の為の交流に力を入れてこられました。昨年8月に現地を訪ね、山の学校の竣工式に出席、今後の関係を打ち合わせてきたところでした。

渡辺さんの気持ちを大切に引き継ぎ、これからも篠山の皆さんと共に活動を進めていきたいと思っております。渡辺さんありがとうございました、そしてお疲れ様でした。

## ○月×日のPHD協会

**職員 古本** アレルギー性の鼻水、くしゃみ、目のかゆみに悩む。研修旅行の道中、岡山のステイ先で漢方の薬を紹介される。これが効く。

**職員 芳田** 一人暮らしの冬の夕食は鍋にキマリ。具はほぼ同じでも、醤油、味噌、キムチ、味噌+牛乳仕立てと豊富なバリエーション。飽きない。

**職員 寺田** 県内研修旅行中、八鹿町の会で研修指導者大森さんの差し入れの鹿の刺身、初体験、美味。タイの村のヘビのスープより良かった。

**職員 藤野** 限られた予算であれこれ食べ歩きできる味といえば麺類。蕎麦、うどん、ラーメン等々。連続でも大丈夫。求む、各地のお薦め情報。

**国内研修生 鴨川** 干芋を求め南京町で寄り道。A店190円。そしてB店200円。100m程戻ってA店で購入するも消費税がついて199円。お疲れ様。

**職員 納堂** 西日本研修旅行の道中、昼に焼肉食べ放題779円を選択。総勢6人でひとつのコンロ。時間が足らず食べ放題には程遠く、悔い残る。

**職員 佐々木** 理事会を控え、忙しい毎日。お昼を食べに出る間も惜しんで、近所の中華料理屋「一貫楼」のとんかつ丼を出前で頻繁に。

以上、脈拍の多い順

（ただしその時佐々木は脈とれず）

## 夏のスタディツアーの 予定

研修生の村を訪ね村人の家に泊り、村の生活を体験する旅にあなたも参加しませんか？

### ◆ ビルマ

7月20日～29日（10日間）約21万円

### ◆ バプア・ニューギニア

8月上旬 約25万円

### ◆ インドネシア

8月19日～28日（10日間）約18万円

定員はそれぞれ13名。日程、参加料など、若干変更の可能性もあります。お問合せ、お申し込みは事務所までお願いします。